

フリーアナウンサー・日本大学芸術学部特任教授 近藤 サトさんに聞く

聞き手 宮田 英里 ●フリーアナウンサー

特任教授を引き受けるまでに 時間を要した理由

宮田 本日は、あこがれの先輩アナウンサーであり、日本大学芸術学部卒業の先輩にもあたる、近藤サトさんにお話を伺います。

大学卒業後は、フジテレビにアナウンサーとして入職され、報道番組のキャスターを中心に活躍されたのち、現在はフリーランスの立場で、ナレーションをはじめ講演やイベント司会などをされています。

さらに、二〇一一年度からは母校の芸術学部放送学科特任教授にご就任され、アナウンス演習や卒業研究ゼミナールなどの講義を担当なさっています。たった今、講義を終えられたばかりの近藤さんに、二〇一〇年に完成した新しい校舎の最新鋭設備が導入された放送スタジオにてインタビューをさせていただきました。

まずは、母校で教鞭を執ることになった経緯からお聞かせいただけますか。

近藤 お話をいただいたときは、大変光栄なことと思いましたが、決断するのには

相当な時間が必要でした。「やりたい」「やりたくない」ということは別の次元の問題で、私よりも教員にふさわしい方はたくさんいらっしゃると思います。そもそも、私が学生に教えるなんておこがましいこと思っていたのです。

それで、お返事ができないままに時間ばかりが経過して、「もう忘れてくれているかな」「あの話、なかったことになったかな」なんて期待をしてみたりと、非常に後ろ向きでした。

宮田 特任教授に就任するまでに、かなり思量されたわけですね。では、そのように躊躇されていた近藤さんの背中を押ししたのは何だったのでしょうか。

近藤 個人的に相談に乗っていただいたある大学の学長に、「自信がない」と話したところ、「あなたは学生よりも四半世紀も余計に生きています。絶対に負けないから、その経験を伝えればいいよ」とアドバイスを受けました。

本学の学部長にも、「学生と一緒に勉強する気であれば大丈夫です」と温かい言葉をいただいたのも大きかったですね。



近藤サトさん(右)と宮田さん(2012年5月17日 日本大学芸術学部にて)

そうした助言をいただいて、いくぶん不安も和らぎ、お申し出をお受けすることにしました。今から考えると、「人に教える」ということは、学術的な専門知識が絶対必要だと思ひ込んでいたように思います。要は自分が積み上げてきたものを包み隠さず、伝えていけばいいと、覚悟を決めたわけです。

宮田 実際に、講義を担当されての感想はいかがですか。

近藤 とても楽しいです。学生たちにさまざまなプラス効果をもたらすよう、自分が経験したことや技術をすべて教えたいと思うようになってからは、非常にやりがいを感じています。

宮田 実は、先ほど近藤さんの講義が終わった直後に、教室から出てきた学生さんたちに「近藤先生の授業はどうですか」と聞いてみました。

すると、「どんな質問をしても、まっすぐに答えてくれるのがうれしい」「すばつと的確に話してくれるから、自分は何をすべきなのかよくわかる」と、口々に話していました。

学生には遠慮や加減をせず

情熱と愛情を人一倍もって指導にあたる

近藤 学生たちが、そう思ってくれているとしたら、私もうれいすね。でも、学生は気を遣って少し穏やかな表現を使ってくれていると思いますよ。実は私、講義中はけっこう強いもの言いをするんです。

伝えたいことは、遠慮や加減をしないで真面目からはつきり言うものですから、学生たちは、いくぶん戸惑うところもあるかもしれませんがせんね。

しかし、情熱や愛情を人一倍もって接しているつもりです。私も大学生のとき、そのように指導されましたから。

宮田 それでは、近藤さんご自身は、学生時代どのような指導を受けてこられたのでしょうか。

近藤 大学とは、本来はアカデミックな教育研究の場という位置づけでしょうが、私が学び、そして今教えている放送学科は少し性質が異なります。

もちろん、理論なども学びますが、どちらかというと、アナウンサーをはじめメデ

イアに携わる専門職の養成機関という色彩が濃い。ひと言で言えば職人の世界です。

それを踏まえてお聞きいただきたいのですが、当時はかなりのスパルタ教育でした。ひたすら学生たちに基本をたたき込む。もちろん、弱音や泣き言は一切聞いてくれない。真夏の暑い日中、ぶっ通しの朗読に疲れきって思わずフロアに倒れ込んで、声すらかけてもらえませんでした。

でも、その先生にはとても愛情があったし、人間的にも大変魅力があった。だから、厳しくされても全く反発もしなかったし、指導方針に対しても疑問も感じませんでした。

今考えると、その恩師と巡り会えたこと自体が幸運だったと思います。NHKの放送作家としてラジオ黄金時代を築かれた方で、その中で編み出したスキルを自らメソッドにまとめて、体系的に教えてくれたのです。おかげでどんな原稿でも読めるようになりましたし、人格形成の大切さも教えられました。

宮田 厳しい言葉をかけ、少しも容赦しない指導をされたのも、より成長してもら

いたという、その先生の愛情だったということでしょうか。

大学教育は人生を左右するほど大事なものです

近藤 口も悪く、眼光も鋭い、とても怖い先生だったのですが、絶対に揺るがない自信と確信をおもちでした。どんなに辛辣な意見を言われても、そのような方の言葉は心に響くものです。社会に出る前にそのような先生に出会い、教育を受けたことは貴重でした。

大学での教育は、その人の一生を左右するほど大事なものです。恩師から厳しく指導されたおかげで、今の私がある。これは揺るぎない事実です。

だから私も、指導するときには自然と力が入ってしまうし、直截的な言い方もしてしまうのです。

逆に言えば、大学教育の重要性、さらには教育に携わることへの責任を、自分の経験を通してわかっていたからこそ、特任教授のお話をいただいたときに、及び腰になつてしまったのだと思います。

宮田 学生時代に培われたスキルや心構えがベースとなつて、アナウンサーとしての活躍につなげていかれたのですね。

近藤 印象的だったのが、フジテレビへ入社して間もないころ、私は新卒採用だったのですが、周囲は中途採用だと思つていたようです。つまり、新人っぽくない。どこかほかの局でアナウンサーを経験してきたはずだと、まことしやかにうわさされたようなんです。

私はアナウンスクールに通つたわけでもありませんし、大学以外は一切アナウンスの勉強をしていません。大学で教わったまま話していただけですが、それが思いもよらず高く評価されました。

それは今でも私の核になっています。学生時代に学んだスキルがあるからこそ、やつてこられたと思います。

ですから、当時教わつた技能や技術を学生たちにも教えてあげたいのです。今や、その先生のメソッドを受け継いでいる人は業界でも少なくなっていますから、少しでも伝承していきたいと思います。

もちろん、恩師のようには教えられませ

んが、十分の一でも伝えることができたら、学生たちにとり役立つはずだと信じています。まだまだ不十分ですが、だんだんと教師業にも慣れてきましたから、もつと厳しくしていこうかなと考えているところで（笑）。

宮田 近藤さんの指導を受けた学生さんが、アナウンサーやナレーターとして、活躍されるのが楽しみです。

ところで、近藤さんがアナウンサーを指されたきっかけについてお話ししたいだけまずでしょうか。

近藤 私は岐阜県出身で、小学生のころは今よりも放送局が少ない時代でした。当時、NHKのニュース番組のキャスターを見て、「すてきな」とあこがれたのが、最初のきっかけです。

でも、何が何でもアナウンサーになりたいと、一途に思っていたわけではなく、もう少し広い意味で、情報を伝えるマスコミという仕事に興味をもつようになりました。高校卒業後に進学で上京したのも、マスコミに関する職業に就くには東京に出たほうがいいだろうと考えたのが理由です。そ

してご縁があったのが、日本大学芸術学部放送学科だったというわけです。

宮田 大学時代は、どのような学生生活を送られていたのでしょうか。

近藤 放送学科の授業では、アナウンスの基本を学んでいましたが、それでアナウンサーになれる保証はありません。

そこで、将来の目標に役立つ経験を積みたいと考え、学生時代はマスコミ関連のアルバイトに精を出しました。

宮田 どのようなアルバイトをされたのですか。

近藤 ラジオ局、テレビ局、出版社と、もうマスコミに関するものは、片っ端から経験しましたよ。テレビ局ではアシスタントディレクターに始まり、最終的にはリポーターまで担当しました。

好奇心が旺盛で、何でもやってみたいと思う性格なんです。

**才能豊かな友人から刺激を受け
さまざまなカルチャーに触られる芸術学部**

宮田 私もそうでしたが、芸術学部にも所属していたということもあり、大学では学

科の垣根を越え、いろいろな刺激を受けたと思います。

近藤 それはもう濃厚に受けましたね。本来大学とは、さまざまな人との出会いを通じていろいろな刺激も受けるし、自分の知らないことを吸収できる貴重な場でもあります。そういう空気に触れることは、非常に大切なことだと思います。

私もそのおかげで、絵画、映画、書籍をはじめとする、さまざまなカルチャーに触れることができましたし、それは今でも自分の糧になっています。

特に、私が学生だったころはバブル絶頂期。社会を挙げて芸術文化への理解が高まっていましたから、なおさらでしたね。

同時に才能豊かな友人たちと交流をもつたことも、私にとっては得がたい経験だったように思います。学生時代の人間関係はやはり特別なものがあります。

宮田 確かに、学生時代の人間関係と社会人になってから職場の人間関係とは、深さや広がりが違うように思います。

近藤 大人同士だと、少なからず利害関係が出てきてしまいます。しかし、学生同

近藤 サトさん



士にはそれがありません。

社会人とは違って、もっと緩やかで柔らかい関係でありながら、ときに豊かな才能をもつ友人から刺激される瞬間があります。それをキャッチすることで、自分もどんどん成長していくことができるのです。人間関係が才能も育ててくれる。

おそらく、私が教えている学生たちも、そうした経験をしていると思います。学生時代にいかにそのような友人と出会い、刺激を受けるかということも、その後の人生への影響力が違うと思うのです。

学生時代を懐かしく思うと同時に、これから羽ばたいていく学生たちに対して、大

きな期待も寄せています。

宮田 学生時代に共に学んだ仲間との付き合い合いは、今でもありますか。

近藤 最近は、ツイッターやフェイスブックなどを通じて、近況を確認したり情報をやりとりすることが容易にできるようになりました。私たちの間でも、それをきっかけに、「みんなが集まろう」ということになって、何度か会合の場をもつようになっていきます。

みんな、それぞれ環境は変わっています。が、社会の中で活躍している同級生も多い。そういう話を聞くと、誇りに思うし、自分の励みにもなります。

仕事で活躍する秘訣は 軸足のぶれない存在であること

宮田 フジテレビのアナウンサーとしてキャリアの第一歩を踏まれ、同級生の方々も近藤さんのことをわがごとくのように誇りに思われていると思います。私も子どもころから、女子アナの最前線として活躍されているのをテレビを見てあこがれていました。

近藤 当時は、とにかくいろいろなことを経験させてもらいました。ニュースを読む一方で、ドラマにも出演したり(笑)。

宮田 えーっ!? どういう役柄を演じられたのですか。

近藤 女性科学者という配役をいただきました。業務命令でしたが、同じテレビという仕事でもドラマ制作は報道とは全く違いますね。

ほかにも、バルセロナオリンピックの取材をはじめ、通常行けないような世界の地域へも行かせてもらいましたし、フジテレビ時代の思い出は楽しいことばかりです。

恵まれていたのは、入社以来、一貫して報道を担当できたこと。いろいろなことを経験しながらも、そうした軸、いわゆる本籍地があるゆえに、自分自身がぶれることはありませんでした。

アナウンサーとして採用され、報道もバラエティもスポーツも何でも経験する。しかし、どこに軸足を置いたらいいのかわからず不安に思うアナウンサーも少なくない中で、私は幸運だったと思います。

宮田 報道でデビューされるアナウンサー

ーは少ないですよね。

近藤 ええ、珍しいことだと思います。

私はたまたまピンチヒッターに指名されたことがきっかけでしたが、やはり学生時代にアナウンス技術を身につけていたことが大きかったと思います。その意味でも、恩師には感謝の言葉しかありません。

宮田 現在、アナウンサーと大学の教員、そして家庭と非常にお忙しい中で、行動の基本となる信条などがありましたら教えてくださいいただけますか。

近藤 うそをつかないこと。自分に対しても学生に対しても視聴者に対しても、正直に誠実に接していきたいと考えています。



宮田 英里さん

そして、もう一つはブレイヤーとしての自分を貫くこと。特に組織に属していたら顕著でしょうが、年齢が上がって部下ができるようになる、指示や指導ばかりが中心になって、自ら積極的に動こうとしなくなる人がいます。

しかし、その一方で、教授であろうが部長であろうが、自分自身が意欲的に行動される方もいらっしゃいます。そういう方の周りではどんなものごとが動いていきますか。

本来、私はものぐさですから、積極的に行動される方を見て、私も見習わなければと強く感じています。

才能がないと簡単にあきらめず

一つのことを最後まで極める強い熱意が大切

宮田 行動することの大切さは、若い人にとっても大事なことですよね。

近藤 もちろんです。学生にも、つねに「実行あるのみ」と強調しています。思っているだけではなくて、行動に移さないと展望は開けませんからね。

そして、何よりも大切なのは、一つのこ

とをやり続ける強い熱意です。私は、最後までやりきる心をもった人間ほど強いものはないと考えています。

才能がないと言われたくらいであきらめてしまっただけはないと、学生たちには言っています。

宮田 思わぬ困難にぶつかったからといって途中で方向転換して、簡単に逃げ出しはいけないということですね。

近藤 少しくらい挫折しても、自分が信じたことを一生続けられれば、必ずその人は本物になると信じています。

石にかじりついてでも、自分が興味をもったことについては、ひたすら極めてほしい。特に芸術の世界ではそれこそが大切だと思っています。

宮田 近藤さんのように活躍するために、アナウンス技術という、一つの軸を極めるということですね。

近藤 アナウンサーに関しては、取り扱うテーマは幅広いし、内容もその都度異なります。ですから、あらゆることに、興味をもたなければいけないということもあります。アナウンス技術と広い探究心が必

要です。

宮田 地道に努力を重ねることが大切なのですね。

近藤 私自身まだまだ未熟ですから、さらにスキルを磨きをかけたいと思っておりますし、日本語をもっと極めたいと努力しています。

宮田 次の目標へ向けた意気込み、また今後の展望についてお話しいただけますか。
近藤 今、大きな関心があるのが「朗読」という分野です。私自身も舞台などで行っていますし、大学でもカリキュラムに入れています。

しかし、世間一般では、映画や演劇、舞台などのように、ジャンルとして確立されているわけはありません。仕事をしながら、この分野の発展に貢献していきたい。最終的には、私たちが行っている朗読が、遠い将来に「古典」と呼ばれるようになるれば最高ですね。

宮田 近藤さんのお話をお聞きすると、強烈なプロ意識を感じます。やはり、生まれ変わってもまたアナウンサーという職業を選びたいですか。

近藤 うーん、それは、選ばないでしょうね（笑）。魅力的な職業はたくさんありますから。

昨日はオーケストラの指揮者になりたいと思っただし、少し前には農業もいいな、と思いました。宇宙飛行士だって、なれるものならなりたいですよ。

もちろん現世ではアナウンサー業を極めていくつもりですが、来世では違うことをやってみたいですね。

宮田 学生に教える教員としての立場での目標はいかがでしょうか。

近藤 フリーアナウンサーとしては、いい仕事をして社会に評価されれば満足という世界ですが、教育者となれば、話は別です。教えることに携われれば携わるほど、人に何かを教える仕事の尊さや大切さを痛感しています。

大勢の視聴者を対象とするアナウンサーとしての仕事のほうが、社会的な影響力は大きいかもしれない。しかし、長い目で見ると教育のほうがより大きな社会的使命なり、責任があるのではないかと考えるようになりました。

ときどき「最近の学生はいまひとつ」などという指摘を耳にすることがありますが、本質的なところは変わりません。むしろ私たち教師の問題ではないかとさえ思っています。

教育とは鐘を打つがごとし

宮田 教員の指導や助言によって、学生の成長度合いも大きく変わってくるということでしょうか。

近藤 私は自戒も込めてそのように思っています。幕末期に坂本龍馬が西郷隆盛を評した有名な言葉に、「ちょうど大鐘のごとし。小さくたたけば小さく鳴り。大きくたたけば大きく鳴る」というのがあります。私は教育とは、鐘を打つようなものだと考えています。大きく打てば鐘は大きな音で鳴り響く。すなわち、教師がよい教育を行えば、学生はそこから多くを学び、成長していくということです。

もし、学生の成績が実際に悪いのだとしたら、むしろ、教える側に責任があるところから考えるべきでしょう。

教員の人生観 哲学・生き方を示していく

宮田 今、大学教育のあり方が議論になり、社会的関心も高いのですが、近藤さんご自身にとって、どのような教育方法が理想的だと考えていますか。

近藤 私などがあまり偉そうなことは言えませんが、二つの点が重要ではないかと思えます。

一つは、私の恩師のような情熱をもった魅力的な教師の存在。今も学内には魅力的な教師はたくさんいます。それをさらに、学生にも積極的に示していくべきではないかと思えますね。

もう一つは、システムの問題です。私は本来の教育とは寺子屋スタイルにあると考えています。つまり、徹底した少人数教育の実践です。

大学とは、小学校や中学校の義務教育のように、教材の内容をカリキュラムに沿って自動的に教えるのではなく、教員の人生観、哲学、生き方なども示していく教育機関だと思っています。そう考えると、人数

を限定した少人数教育のほうがより深く教えられるようになります。

宮田 教員が一方的に知識を伝達する講義形式の授業では、一度に多数の学生を参加させるほうが効率的ですが、それとは正反対の考え方ですね。

近藤 もちろん、大教室での授業スタイルも確立されていますし、ある程度の効率性も必要でしょう。

しかし、ゼミなどでは、もつと血の通った手厚い指導が必要だと思います。とりわけ、これからは少子化が進み、学生の人数が少なくなるのは確実ですから、その中でいかに質の高い教育ができるか、学生たちに人生の指針を与えられるかが鍵になってくるのではないのでしょうか。

少し話が大きくなりますが、イエス・キリストも釈迦も、身近な弟子は多くもっていますませんでした。互いの人間性を深く理解したうえで教えたいと思うと、おのずと教える人数にも限界があるでしょうね。

私が大学の中で、学生たちに教えることができるのはただか一年か二年、時間になると百時間もありません。しかし、その

中で、私のもっているものをすべて教えていきたい。本当は、寝る暇もないぐらいに課題も与えたいです。そして、卒業したあとも、生涯にわたって学生たちの活躍を見ていきたいんですよ。

もちろん、どれだけ教えても、教え尽くすという地点にはたどり着かないでしょう。私自身、今になっても、もつといろいろなことを恩師から学びたかったという気持ちもっています。将来、私が教えた学生たちも、同じように「近藤先生ともつと勉強したかった。もつと教えてもらいたかった」と感じてくれれば、これほどうれしいことはないですね。

今の学生は私は二十歳以上も年齢が離れています。子どものようなかわいい存在だから力になってあげたいのです。心から応援したいと思います。

宮田 お話をお聞きすると、近藤さんの講義を受けている学生たちがうらやましくなってきました。

これからも、アナウンサーそして大学教員として、より一層活躍されることを願っています。本日はありがとうございました。